

## ● シリーズ 私の見た日本 Vol.156

## 研究と生活を振り返り

江 文菁 (コウ・ブンセイ)

台湾台中市出身。2008年台湾国立聯合大学理工学部建築学科卒業、2010年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了、2014年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、同年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻、日本学術振興会特別研究員。2015年佐藤総合計画入社、現在に至る。



今のところであるが、人生の半分を日本で過ごしたこととなった。

私が日本に初めて来たのは、ほとんどの日本人と同じく病院で産声をあげたときだ。日本での生活が幼少期のすべてであったため、「日本」がいつの間にか私の中では「基準」となっていた。小学校に入学する頃帰国となったが、大人になってからは親の関係ではなく、再び自分でこの国に来たいと思った。

東京大学に在籍した6年間は地域福祉をテーマに研究を続けた。来日当初はこれから何を研究していくか悩んでいたところ、何かのご縁か、テレビのニュース特集から日本には高齢者と子どもと一緒に受け入れる施設があることを知った。台湾の大学に在籍した際に、学部生対象の研究助成で高齢者施設を研究したことがあった。今時姥捨とまでは言われなくなったが、どこかそういう雰囲気を感じるのが台湾の高齢者施設であった。台湾の状況を知っていたからこそ、子どももいる高齢者施設が私には先進的に感じ、「これだっ!」と直感した。それが私の「富山型デイサービス」との出会いのはじまりである。

日本の施設以外にも台湾、北欧諸国(デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー)の施設も併せて見学とインタビューを経ているため、気候や福祉制度は異なるが、本稿では施設内での生活と使われ方など建築計画の視点から違いを述べたい。

私の研究対象の富山型デイサービスは、乳幼児から高齢者まで、障がいのある・なしにかかわらず利用できる、富山県で生まれた共生ケア施設である。開設当初は社会的入院で自宅に帰れない認知症高齢者を対象に、地域で支えていくために設立された。しかし、最初の利用者は障がい児を持つ母親からの

申し込みであった。子どもが生まれてから3年間美容室に行っていない切実な利用動機に驚いて、地域ニーズに即したサービスを提供しようと始まったと言う\*\*。地域的に持家率が高い影響もあるのか、古民家を転用して運営している施設が多い印象を受ける。また、県単独事業で既存の建物を改修して運営することに補助金が助成されることも、古民家転用が多い一因なのかもしれない。台湾、北欧の施設と比べてひとこと言うと、富山型デイサービスは「家」なのである。

小規模で「施設」ではなく家庭的な雰囲気を目指している富山型デイサービスは古民家転用で運営しているところはもちろん、新築で運営しているところも将来経営困難に陥った時に、自分たちの住まいにできるよう意識して建てられた施設もあった。整備基準があるため、本当の住宅とは少々異なるが、玄関、居間・ダイニング(食堂及び機能訓練室)、部屋(静養室)は一般の住宅とさほど変わらない。水廻りのトイレ、風呂場は車椅子利用や介助スペースが必要なため広めになっているが、フローリングにカーペット、人が集まると少々狭く感じる空間スケールは住宅の雰囲気を感じさせられる(写真1)。

北は北海道から、南は九州まで日本の福祉施設を見学してきたが、台湾や北欧との生活スタイルの違いは「床」での生活であろう。台湾の住宅市場でも「日本式部屋」と称しフローリングに掘り炬燵(実際はテーブル)をセットしたインテリアスタイルがある。それ以外の場所ではあまり床に座ることはない。しかし、日本は畳が家庭から消えていっても、カーペットや床暖房などを工夫し、ソファや椅子などの家具が混在する空間に床に腰を下ろすことがまだ見られる。私が研究してい

る富山型デイサービスは足腰がわるくなり椅子とソファにしか座れない高齢者もいれば、まだ床に座れる高齢者もいる。その傍ら、ハイハイする乳幼児や、座位が保てなく床でゴロゴロする障がい児、車椅子で移動する障がい者が同じ空間にいる。このような光景は日本でしか見られない、もしかしたら富山型デイサービスでしか見られないであろう(写真2)。

10年前の台湾の通所施設は少なかったと言える。在宅生活を支えることに関しては、外国籍介護者を家庭内で雇用できるため、「施設」を利用する高齢者は入所・入居が主な傾向としてあった。したがって、台湾の通所施設は地域差もあるが、公民館の一部で運営するものや、病院併設の医療法人が運営主体となるものまで様々である(写真3・4)。

家でゴロゴロしたり、食べたい時間に食べたいものを食べたり、入浴したい時間に入浴したり、友人に会いたい時に外出したりなど自由気ままに過ごしたいのが普通であろう。70代、80代になって介助が必要だから施設に通わざるを得ないうえ、団体行動(レクリエーション)をしないだけに協調性が悪いと若者(スタッフ)に非難されるのはどうかと思わないか、と疑問を突きつけてきたのが富山型デイサービスの創設者であった。一方、北欧では高齢者に限らず、個性を尊重する文化が根付いているように感じた。フィンランドで見学した保育所は、子どもたちに自分たちが遊びたい遊びをさせ、必要な道具もセルフでつくる。グループで異議が発生した時には子どもたちだけで解決できるよう見守る。要するに、自分たちが何をしたいか、それに達成するためには何をやるべきか、そし



写真1 富山型デイサービスのダイニングの一角@富山。好きなモノを好きなだけ好きな時に楽しむ、家と同等な自由さ。



写真2 富山型デイサービスのダイニング@富山。ソファに座る、車椅子に座る、カーペットに座るなど、利用者の状況によっていろんなタイプの高さがある。



写真3 公民館に設置されたデイサービス@台湾。テレビに向かっての座席レイアウト。床は一般家庭同様のタイル仕上げ。



写真4 病院のリハビリ科に設置されたデイサービス@台湾。レクリエーションに参加する人と、リハビリ待ちの集団。

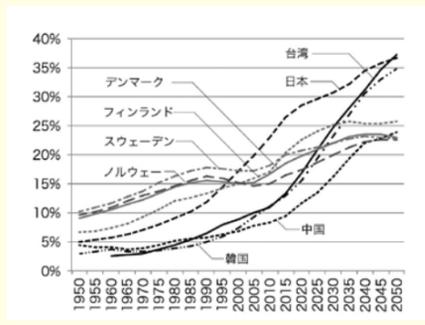


図1 各国経年高齢化率予測\* (筆者作成)

注釈

※1 日本は室内が清潔のため、いざることが安全で可能だと思っていたが、室内が土足のアメリカでも障がい者がそのままにせず床でいざることもあるという。

※2 United Nations Population Division Department of Economic and Social Affairs, World Population Prospects: The 2012 Revision より。なお、台湾の数値は行政院国家發展委員会「人口推計」より。1950年から2010年までが概算値で、2015年から2050年は推測値である。台湾のデータは西暦とは異なる年号集計の関係で1951年から2051年の数値である。

て問題が起きた時にどうすればよいかを総合的に考える時間が与えられていた。個々人の意思の尊重は高齢者や子どもに限らず、会話ができない意思疎通が難しい障がい者にも同様な対応があり、そのような対応は制度や施設・住宅などの建築の面でも垣間見ることができる。

2014年、スウェーデン・マルメで見学した補助器具センターは、障がいを持つ人を対象にしているが、それは、様々な工夫を通し、一般の人と同等な生活が送れる工夫でもあった。事故のケガや身体の衰弱で、「移動」は1つの大きなバリアを感じるようになる。この施設では、それらを解決する補助器具が揃っており、そのうちの一種類が電動車だ。しかもそれは屋外用と室内用に分けられている。台湾で屋外用のものは見たことがあっても、さすがに室内のは初耳であった。自宅でも自由に自分の意思で移動できる自己決定の文化が根付いていた。室内専用のために小型につくられた電動車だが、アジアでもそ

れが普及するとは想像し難い。

つい先日のことだが、他県で留学している妹が積雪に足を滑らせ学生寮の階段から落ちてしまった。足が回復するまでの生活を考えるとエレベーターが設置されている私の家には「一時避難」した方がよいと思ったが、私の家は電気カーペットにローテーブル、そして布団の生活。骨折した一時的障がい者にはお世辞にも住みやすい家とは言えない。最終的には友人の留学生同士シェアで借りている1階の物件に、帰国日まで泊めてもらった。北欧のように、自宅の中でも電動車が使えるような生活スタイルだったら困らない問題だったのかもしれない。

電動車や車椅子での自由な移動とは少々異なるが、福祉の研究で、床に座ったまま移動する「いざる」ことを知った。いざることができれば補助器具や車椅子などがなくても、他人の介助なく自分の意思で移動できる。見学調査した富山型デイサービスでも座位

を保てない障がい児にいざる行為が見られた。これらはアップダウンがない床の生活が可能にしたもののように感じた\*1。

世界の高齢化の加速はとどまることを知らず、2050年までの高齢化推移予測をみると日本の高齢化率は36.6%である。しかし、近隣の中国(23.9%)、韓国(34.9%)、台湾(37.2%)も急速に高齢化が進むとされ、世界の高齢化問題はアジアの高齢化問題といっても過言ではないだろう(図1)。その中で、現在の日本の高齢者や障がい者がどのように、どの時期において床、家具、福祉機器の生活スタイルをバランスよく使い分け、移行していくかがアジアの高齢者生活スタイルへの糸口になるのではないかと思った。少子化の影響で、高齢化が急速に進む台湾にもその知見と経験を伝授いただければ幸いです。

参考文献 ※ 惣万佳代子：笑顔の大家族このゆびとーまれ「富山型」デイサービスの日々、水書坊、2002年